

校長室だより

11月号

杉並区立向陽中学校
平成30年11月29日発行
校長 菅野武彦

「人間賛歌が響き渡る学校づくり」を目指して

【今年度のキーワード】

「チーム向陽 ～みんなの向陽中学校～」

◇ 『安心して学べる向陽中学校』にしたい！ ～自分に向き合うことを通して～

多くの生徒が集い共に学ぶ学校では、生徒に学力を身に付けさせることと同程度に、「共に学ぶ、共に生きる」ということを考えさせ、毎日の実践を通して学ばせることにも心を砕いています。学校経営の今年度重点目標の一つに『安心して学べる向陽中学校』を掲げているのもそのためです。生徒には毎日の学校生活で「共に学ぶ、共に生きる」とはどういうことかを考えてほしいのです。その土台となるのが「自分に向き合う」ということ。つまり、自分には前向きになれることがあり、自分を肯定的に捉えることができ、かつ自分の課題に向き合っている状態をいいます。こうした土台の下、周りの生徒との関わりを通して、自分で考え、共に考え、よりよい学び方や生き方を追い求めてほしいのです。大人は子どもにそのきっかけを与えるのが仕事とも言えます。生徒には必ずや自分の好きなことや得意なことがあり、多くの生徒はそれらをうまく土台にできています。一方、そうした変換がうまくできない生徒もいます。そうした生徒はどうしてもマイナス思考に陥りがちです。どうしても言動が投げやりで後ろ向きになってしまいます。こうした状況こそが大人の出番です。時間はかかりますが、“少しずつ！ちょっとずつ！”を合言葉にあきらめずに声をかけ続けることと、ここぞ！という機会を逃さないことです。

〈「思いやり・感謝の心」を育てたい！〉

ご家庭でも我が子に思いやりがあり、あいさつができて、ありがとうと人に感謝できる人に育ててほしいと願い、我が子をしつけていると思います。実は本人だってそうありたいと思っているはずで、小学生の頃は素直に聞いてくれたのに、中学生ともなれば反抗期に入り思いとは裏腹な態度を取っては親を慌てさせることもあるでしょう。これはある意味避けては通れないこと。そして、本人が一番悩んでいる証でもあります。親への反抗は通過儀礼と思えば、開き直れますし、親のスタンスが変わらなければ却って我が子も安心できます。



町ぐるみ運動会「玉入れ」で小学生を前に活躍する生徒達

向陽中生は人との関わりを通して人間関係を学び、学年が上がるにつれて「人を思いやる心」や「人に感謝する心」を確実に身に付けています。表情が穏やかになったり、物言いが優しくなったり、とげがなくなったりすることで実感しています。ただ、時間のかかる生徒もいます。我慢強くねばり強く働きかけたり、本人の自覚を待ったりしています。

〈「特別の教科 道徳」で“考える・対話する”授業の実践へ〉

答えが一つではない課題を一人一人の生徒が道徳的な問題に向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へ転換を図っています。生徒が問題意識をもち、考えなければならないことについて主体的に考え、対話、議論を深めたい授業づくりです。大切にしたいことは、生徒が何に気づき、どのように感じ、考えているのか、そして、その学習を通して、何が身に付き、深まり、また、高まっているのかを確かめる視点です。

本校が取り組んでいる4人組での対話学習は道徳の授業においても活用されています。まず自分で考え、4人組でそれぞれの考えを述べ合う。違った考えを受け入れたり、なぜと聞き返したりして、自分の考えに照らし合わせてみる。最後に自分で気付いたことや考えたことをまとめる。こうした一連の学習を通して、自らの考えを積み上げていくのです。道徳の授業はある意味「自分軸」の形成とも言えます。



2年生 道徳「いじめ0%五ヶ条」を考える

〈「いじめのない向陽中学校」をつくる〉～ 組織的かつ生徒の心に届く対応を～

「いじりといじめはどこがちがうか」。先日、小学4年生の道徳の授業の様子が載った新聞記事を読みました。児童は次々に発言する。いじりは“じょうだん”、“おもしろ半分”、“少しの時間”…。いじめは“じょうだんなし”、“暴力や暴言”、“本気のけんか”…。この学級は明るく活発な子どもが多く、時々遊び半分で友達を「いじる」雰囲気がある。それを知る先生は「いじめといじり、どこが違うかな？」と聞く。そして、自分たちで答えを見つけようという気持ちを引き出そうと、子どもだけで話し合う時間を作る。話し合い後、考えがまとまった子が発言した。



向陽中に集う「町ぐるみ運動会」はこの地域の宝物です！(*^o^*)

「いじりは自分も笑えるけど、いじめは悲しくて涙が出そうになる。自分が笑ってられるかどうかの違いです」。また、ある子は「いじりはいいけれど、いじめはなくしたい」と。結局、結論めいたことは出ないまま授業は終わる。「いじりもいじめもダメだ」と結論づけることは簡単です。時間がかかっても「これはやり過ぎ」と様々な状況を判断できる、自分なりの基準（自分軸）を見つけてほしいのです。

向陽中学校も例外なく「いじり」や「いじめ」があります。学校は「いじめ」は絶対に許されないという考えの下、継続的に生徒に呼びかけたり働きかけたりしています。生徒も「いじめはだめ」と頭では分かっています。それでも、まだまだ未熟な子どもたちの世界です。大人の目を盗んで悪さをしたい盛りでもあります。「遊び半分だった」とか「冗談だった」とか、言い訳に必死になる年頃です。こうした中学生の複雑な心模様を斟酌(しんしゃく)するならば、大人の対応も生徒の事情や心情をしっかりとくみとった丁寧なものでなければなりません。いじめ対応マニュアルには、基本的な姿勢としてそれぞれ「いかなる理由があっても、徹底していじめを受けた児童・生徒の味方になる」・「いじめを行った背景を理解しつつ、行った行為に対しては毅然とした態度で指導する」とあります。こうした姿勢を第一義として、いじめを受けた被害者の心情

にも、いじめをした加害者の心情にも配慮した姿勢を共有し対応してまいります。

〈「杉並区立中学校連合文化祭」への参加で活動の幅を広げる向陽中生〉

生徒の頑張りを認め励ますことはその生徒に自己肯定感を育むという点でとても重要です。一昨年度より杉並区立中学校連合文化祭の“書評座談会”と“英語学芸発表会”に生徒が参加しています。今年度も生徒の活動の幅を広げ、挑戦する、人や書物、作品などに学ぶことをねらいとして生徒が取り組みました。自らの意思で挑戦し活動するという点では、学校内の委員会活動や校外のボランティア活動等と同じと言えます。杉並区内の中学生が集う折角の機会を逃す手はありません。また、セシオン杉並に展示された“杉並子どもサイエンス・グランプリ 2018”の「研究記録物」は、生徒が夏休みに自由研究としてまとめたものです。理科の先生の働きかけがあつての生徒の挑戦です。これからもこうした機会への参加を生徒に呼びかけていきます。連合文化祭には美術作品と家庭科の作品も展示されました。向陽中生とのセンスを感じさせる素敵な作品でした。向陽中学校の展示発表会は12月3日(月)～8日(土)に開催されます。是非ともご覧ください。



(上左・下左) 英語学芸発表会でのスピーチ (上中) 第60回書評座談会の参加生徒 (上右) サイエンス・グランプリ生徒作品 (下中) 美術作品 (下右) 家庭科作品・美術作品

◇ **生徒が生き生きと学ぶ姿はいいものだ！ 11/9(金)『研究発表会』開催**

11月9日(金)は向陽中学校『研究発表会』でした。当日の内容は「研究授業」→「研究発表」→「講演・演習」という順でした。ここでは研究の最も重要な生徒の学び、いかに生徒が主体的に対話的に学ぶかに焦点を当てた当日の画像を紹介します。これは次期学習指導要領のキーワードとも言うべき「主体的・対話的で深い学び」が目指すところです。





1年社会



3年理科



3年体育男子



1年英語



1年国語



2年社会

◇ 学校評価アンケートにご協力をお願いします ～生徒・保護者・地域対象～

明後日から師走12月です。暖冬の影響なのか、ようやく北海道で降雪や積雪の便りが聞かれました。新年度がスタートしてはや8か月が過ぎました。今年度は、生徒に「がんばれ！自分。私がやる！」を求め、生徒に実践を求めています。生徒のやる気や主体性を演出したいからです。また、「チーム向陽～みんなの向陽中学校～」をキーワードに教職員がチームワークを発揮することを目指しています。もう一つ、上記でお知らせしました区教育課題研究「主体的・対話的で深い学びを通じた学力の向上」の研究発表会を開催しました。教職員がこれこそチームワークよく取り組み、生徒の生き生きと学ぶ姿を演出しました。昨年度より、めざす生徒像を「自立的に活動できる生徒」に改め、「自立的に活動できる生徒及び集団」に育てることに力を入れて取り組んでいます。今年度も残すところ4か月となりましたが、今後もよろしくお願いします。

さて、今年度の「学校評価」を始める時期となりました。学校が「自己評価」を行う際の適切なデータを得るため、生徒とともに保護者・地域の皆様に学校評価アンケートをお願いしました。内容は昨年度とほぼ同じです。11月26日(月)に生徒を通じて「保護者アンケート」を配付しました。12月7日(金)までにご提出ください。地域の皆様方もよろしくお願いします。

◇ [11月のベストショット] “がんばれ！自分。私がやる！”

〈 保育体験で笑顔を見せる3年生 〉 3年生が家庭科の授業で「保育体験」を行いました。毎年、下高井戸児童館と南永福児童館の御協力を得て行っています。見てください。幼児を目の前にした3年生のこの笑顔を見てください！素敵ですね。“かわいくて仕方がない！”といった表情です。こうした保育体験授業は生徒にとって人間の命の尊さを実感したり、自分自身も親に育ててもらっているという実感が湧いたり、とても貴重な体験となっています。

